

資料紹介

梅州市域散策記

——「凌風東、西路歴史文化街区」を中心に

生 田 頼 孝

序 客都・梅州

筆者は2024年2月から2025年6月まで、梅州市（広東省）にて、嘉応学院に勤務し、暮らしてきた¹⁾。

筆者は『華南研究』第10号にて、梅州の山奥にある円楼・花萼楼を訪問した際の訪問記を発表した²⁾。この拙稿は過疎地域での訪問記であったのに対し、本稿は市域での訪問記である。

梅州の街は「客家の街」であり、市内の商用看板にも「客家」、あるいは、「客家の街」であることを示す「客都」等の文字が目立つ。コンクリートの壁にペンキで直接書かれているものも少なくない（図1）。

こうした梅州は観光の街でもあり、梅州市域の「凌風東、西路歴史文化街区」は、南北朝時代に始まったとされる地区である（図2・3）。

この「凌風東、西路歴史文化街区」では、各々の建物の外壁がピンク等、多様に塗装されている他、窓がステンドグラスになっている建物が見られる（図4）。「東南アジアのイギリスの植民地として発達した諸都市」に騎楼式が見られることが指摘されていることから、「中西合璧」（中国－西洋が隣り合っている）の特徴であろうか³⁾。

故に、客都・梅州は新旧と洋の東西の混合等、特徴ある街でもあり、その特徴は考察、紹介に値すると思われる。本稿は「凌風東、西路歴史文化街区」を中心とした梅州市域を紹介する散策記である。



図1 コンクリート壁に書かれた水道修理業者の看板。右には、「客家美食」という料理店の看板



図2 「凌風東、西路歴史文化街区」の地図



図3 「凌風東、西路歴史文化街区は民国21年（1932年）に建てられ、旧時の南門一帯の“凌風樓”の名を得ており、建築群の多くが、中西合璧の騎樓式客家民居商業建築を為しており、20世紀、30年代の“清明上河図”式の客家風情を保持しており、世の人々に久しく衰えない老街の故事を説明している。……凌風東路478メートル、凌風西路453メートルは、梅州老城の最も典型的な風貌特色を有する歴史特区であり、今日に至るまで尚、“前門商店、後堂作房、樓上寢室”の伝統的特色を保存し、現在の梅州市国家級歴史文化名城の特色建築群の1つであり、又、梅州発展、文化旅行の重要な担い手である」



図4 多様に塗装された騎楼式建物（左）と窓がステンドグラスになっている建物（右）



図5 商店街の土産物店（左）と同店内にて購入した商品（右）。

I 商店街

「凌風東、西路歴史文化街区」は商店街であり、土産物を売る店舗等も数店舗、存在している（図5）。観光客等の呼び込みを狙って「中西合璧」が維持されているのであろう。

「凌風東、西路歴史文化街区」は、五代十国の南漢時代に比較的安定し、人口が増大した同地は、敬州と称されていた。しかし、宋に降伏した後に、宋の太祖の祖父の名・趙敬の諱を避けるべく、「梅州」と改名されたのであった。元、明、清の各時代を経た後、中華民国期に城壁を解体し、

現在の市街地の原型となったのであった（図6）⁴⁾。

この地区を管轄しているのは梅江区政府であり、政府庁舎は、中華民国期からのものである（図7）。

こうした「凌風東、西路歴史文化街区」の一遇に「望杏坊」と書かれた石門（牌坊）がある。清代（1673年）に創建されたとされ、この地区から進士が続出したことが記念されている（図8）。

「凌風東、西路歴史文化街区」からこの門の左の分かれ道を入って行くと、古い建物が並ぶ地区（以下、「路地裏」と表記）へと入って行く。



図6 路面に描かれている清代の城壁で囲まれた地図（左）と民国時代に城壁が解体され、現在の地区の原型ができたことを示す路面のプレート（右）



図7 梅江区政府庁舎



図8 石門（牌坊、左）と石門に取り付けられた説明パネル（中）、「路地裏」に続く道（右）。道の両脇の建物はやはり、騎楼式であり、多様な塗装が為されている。



図9 危険建物に指定されている建物。電気装置があることからこの建物も最近まで、現役として使用されていたのかもしれない。

Ⅱ 路地裏

この地区では、丸瓦によって屋根が葺かれた建物を始め、築何十年を思わせるくすんだ石造りの古い建物、住宅を多く見かける。中には、草が生え、既に使われておらず、危険建物に指定されているものもある（図9）。

しかし、現在なお、無造作な建て増しが思われつつも、現役の住宅として使用されているものも少なくない。又、そうした無造作な建て増しが為されていると思われる建物群の中を、電線が空中に走っているのである。その高度は、2メートル弱の箇所もあり、身長180センチ強の筆者としては、頭が気づかぬうちに電線に触れそうになり、場合によっては感電の危険があったかもしれない



図 10 いずれも住宅街の風景。電線の敷設、建増等が無造作に為されている感がある。



図 11 彫刻の入った建物。何時の時代に竣工したかは定かではないものの、当時は美しく飾られていたのであろう。現在の「凌風東、西路历史文化街区」は中華民国に建設されたことから、中華民国期のものだろうか。しかし、こうした建物にも無造作な建増等が見られる。

と思う等、少々、恐怖を感じた（図 10）。

こうした地区は、人々の私生活の地域とも言える。先の商店街と異なり、建物の建替がなされないまま、電線が、各個人、各家庭の需要に合わせて、無秩序に敷設された感がある。その意味では、各「個人」（私）の都合が優先された結果、「公」の空間が無秩序になっている社会であるとも言える。

又、こうした地区は、「楼上寝台」の価値観故に、人口増に合わせて増築が為されたものであろう（図 11）。

しかし、「公」も「私」も「社会」であり、「公」は各「私」の活動の影響を受ける、或いはその反映であり、逆に「公」が汚染されれば、「私」も影響を受けることになる。かつて、衛生環境が未整備であった時代での伝染病の蔓延等がその具体例である⁵⁾。

そうしたことを意識してか、公衆トイレは、筆者が見た限り、全て水洗式であり、又、洗面所では手をかざせば水が出る自動式蛇口になっていた。又、ゴミも種類ごとに分別して投棄する制度である。現実の投棄については、必ずしも制度通りに分別されていないと思われる面もあるものの、



図12 水洗式公衆トイレ（左）と分別投棄のためのゴミ箱（右）

「公」－「私」は一体の存在であり、分離できないことを踏まえて、衛生観念は一定の進歩が為されているように思われる（図12）。

しかし、先の石門（牌坊）をくぐって進んだ近隣の地区では、料理用であろう水槽での魚類の飼育や、野菜の路面販売等がなされ、悪臭を放っていた。又、野菜の路面販売は嘉応学院近くの路上でも為されており、野ネズミが走ってるのを見かけることもある。こうした点では、衛生環境が良いとは言えないであろう（図13）。

こうした姿は、各個人が自身で自身の「私」を経済面にて自活するために必要な行為であろう。又、「公」というべき公衆トイレは「私」からの税金等で維持されているであろうから、野菜の路面販売等は、「公」、「私」を問わず、「社会」を機能させるためには、不可欠な存在なのであろう。

なお、昨今、コロナ感染によって、全世界がパニックになる状況となった。この件については、武漢等で「珍味」のため、食用として野生生物を掘り起こしたことが一因、という報道があった。そうした活動も、「私」のために必要な行動だったのであろう。

コロナ騒動の真因が武漢等での「珍味」のための食用として野生生物を掘り起こしであったとすれば、コロナ騒動は「私」のための不衛生が全世界規模で「公」に悪影響を及ぼし、それが各自の「私」に反射的に悪影響を及ぼした現象であったとも言えよう。

しかし、「社会」として「公」－「私」は分離できない以上、このような状況に陥らない限り、「私」の多少の不衛生は、衛生の維持・改善を含めた「公」のために容認されなければならない、というのが現状なのかもしれない。



図13 梅州市内の八百屋。窓やバルコニーには隙間なく鉄格子が嵌っており、衛生環境以外に、治安もなお、不安定である面があることを思わせる。

Ⅲ 衛生環境

先の石門（牌坊）から入った路地裏を歩いている時、一種の「清掃代行業」と思われる広告を見かけた。又、行政としても、衛生環境に注意すべきことを社会に呼びかけている（図14）。

ある人が他の「私」の生活を衛生的にすることを生活に不可欠な金銭と交換に担うことによって、「私」における「経済」を成長させ、納税額を増やし、「公」の改善に貢献させるといった構図が存在すると言える。

いかなる「個人」も生きている限り、ゴミの発生等、一定の不衛生は不可避であり、又、商売柄の不衛生も不可避である状況であるなら、「公」の衛生環境の維持、改善には、より多くの「私」における衛生への努力が必要であろう。

市場経済が定着している昨今、各個人が社会を生きるにあたって、金銭は不可欠な手段であり、より多くの稼ぎが求められているのであろう。それを反映してか、「凌風東、西路历史文化街区」近くには、「華光財神廟」という廟があった（図15）。



図14 「清掃代行業」の広告（左）と、衛生環境に注意することを呼びかける行政のポスター（右）



図15 「華光財神廟」の正門（左）と壁（右）。「南無阿彌陀佛」と大書されていることから、仏教系寺院であるらしい。

Ⅳ 宗教

市場経済が社会の方向性として定着している今日、経済成長のために、宗教とも融合している感がある（図16・17）⁶⁾。

観音は客家族の居住地域をも含めて、仏教諸神中、最大の影響がある神である。仏教徒は田圃の間に小さな廟を作る等によって、奉っている。「南無阿弥陀仏」は仏教の神であり、又、仏教徒が唱える言葉でもある他、ある場所での事故等が発生した時、事故現場に、「南無阿弥陀仏」と刻んだ石碑等を立てることによって、佛による保護を求めながら、災害についての警告の意味も持たせていた（図18）⁷⁾。

それ故か、「私生活の地域」でもある「裏路地」に存在していたのが、祭祀関係の商品を売る店舗である。こうした店舗では、「紙銭」（祭祀用の「紙幣」）が売られていた（図19）。

華南の社会は「宗族」の影響が強い。客家は宗族を通して、「一定程度上、教育の提供、社会保



図16 観音像を置いた拝殿内



図 17 拝殿内には多様な仏像が安置されていた（左）。また、仏像のみならず、商売の神である関羽像（右）も祀られていた。



図 18 「路地裏」にあった小さな廟（左）と「南無阿弥陀佛」と刻まれた石碑（右）



図 19 「紙銭」は死者やあの世の神等に供えられる。生者に使うと「呪い」の意味になってしまうので注意が必要とされる⁸⁾。



図 20 「宗祠は客家宗族の核心的象徴として、重要な符合意義を発揮している。……ある種の客家子弟の考取を記念して、功名を用い、宗祠内の族譜、堂連、篇額等はいずれも、客家子弟の勤勉向学を激励している」⁹⁾（「状元合格」とは進士主席合格を示す語句）



図 21 いずれも、科挙合格者たる「進士」の表札が掲げられた民家の玄関

障、公共秩序維持等の作用を発揮して来た」¹⁰⁾。故に、昨今では公共機関による代替などによって、弱体化したものの、「客家宗族の核心的象徴として」宗族に関する廟が存在し、「紙銭」は、こうした祖祠に祀られる（図 19）。

客家は一般的に祖先の霊を崇拝する文化的傾向を持っており、祖先を追うことと崇拝することによって、祖先が後世に庇護し、生者に福をもたらすことを祈っている。客家のことわざでは「神を敬うより祖先を祭る方が優れている」と言われる。祖先崇拝は客家信仰の核心であり、又、家族体系の精神的支柱であることによって、系統勢力を発展させる精神的支柱であり、宗族体系を維持する重要な手段とされる¹¹⁾。

又、宗祠の他にも、科挙の合格を示す表札を掲げた住宅も存在する（図 21）。

李氏宗祠（図 20）のすぐ近く（約 50 メートル）にやはり、科挙とも関係していた「学宮」が存在している（図 22・23・24）。

V 学宮

「学宮」の中の「大成殿」内には、多くの短冊がかかっていた。その中には「高考」を願う短冊も少なくなかった。日本の受験生の神社での願掛けと同じ種類のものなのであろう。

「崇文尚学は客家人の伝統美徳なのである」

であることから、梅州では、伝統的に教育熱心、或いは、試験合格に重きを置く傾向が殊に強い。客家人は、自然、社会条件が厳しい中、学習による出世のため、教育を重視していた。客家人は、政府の教育を待つのみならず、宗族として祠堂を弁学点とし、必要な費用を出す努力をし、子弟の科挙合格のための環境を整備していた¹²⁾。

学宮境内の左側にある建物（西廡）に入ると、広東省内での中国共産党の革命の歴史が功績とし



図 22 「学宮」の「大成門」（左）と「大成殿」（右）。今日では「梅江区博物館」でもある。

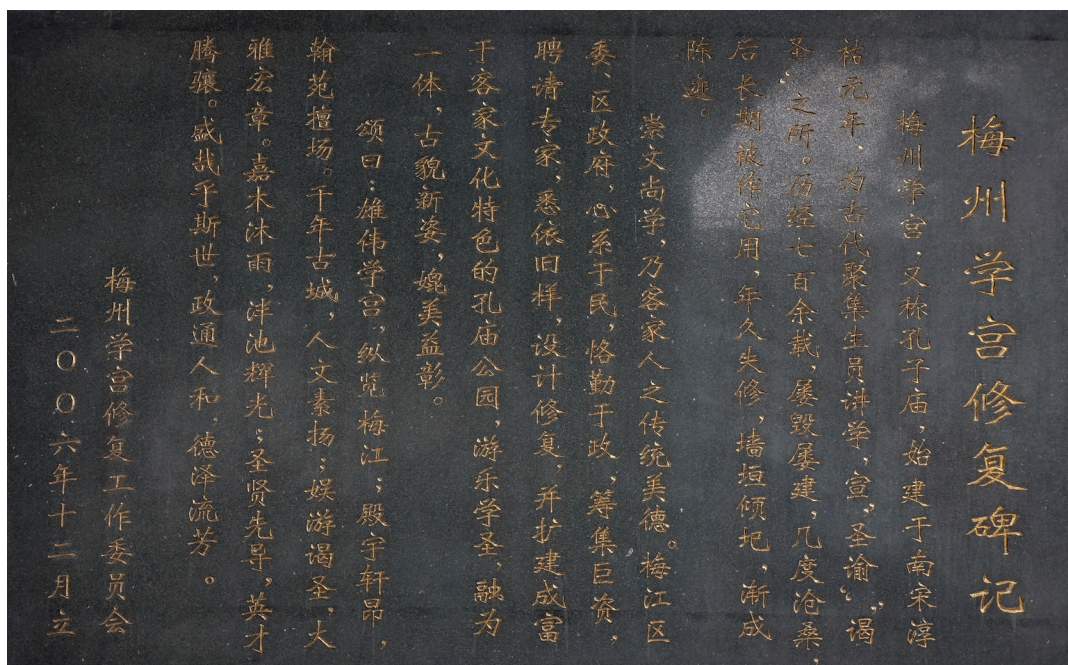


図 23 「学宮」は「孔子廟」とも称され、南宋時代に建設された生員（科挙の郷試受験資格者）を教育し、「聖諭」等を宣する場所であった。700 年間、破壊と再建が繰り返された。「崇文尚学は客家人の伝統美徳なのである」ことから、梅江区委、区政府は、巨資を集め、専門家を招いて、かつてのように修復し、又、客家文化の特色ある孔子廟公園へと拡張建設したのであった。



図24 「大成殿」内の孔子像（左）。その右脇には、「心に思うことを成し遂げる」の標語の下、「高考」合格祈願を含め、多くの短冊がかかっていた（右）。



図25 中国共産党の活動が解説するパネルが展示されている「西廡」。出入口右側には他の地域でも見られる「永遠に党と共に歩む」の標語が見られる。

て紹介されている。

陳炯明（1878－1933）を広東省から追放した第一次、第二次東征¹³⁾から、1949年の広東省での中国共産党の政権成立までがパネルで紹介されている（図25）。

今日の中国共産党政権下における中国の中でも、広東省にて強調されるのは、やはり客家人の葉劍英であろう（図26・27・28）。

葉劍英については、中華民国時代からの鉄橋・梅江橋にも、同地が、「客都」であることと並んで、彼を強調する語句が掲示されている。



図 26 「西廡」での写真。葉剣英等は熱烈に歓迎された、とある¹⁴⁾。



図 27 「剣英紀念大橋」から撮影された梅江橋。「葉帥故里 世界客都」の標語が掲げられている。



図 28 二車線の梅江橋（左）と「共に客都文明を享ける」の標語を掲げた「剣英紀念大橋」（右）

毛沢東時代、中国共産党政権は市場経済を否定した。それに対し、客家人は市場経済にて活動する人々である¹⁵⁾。21世紀の今日、最早、毛沢東時代の市場否定に戻ることはできないであろう。市場経済による金銭を媒体とした相互作用によって、社会、つまりは、各個人の生活は成立しているのであり、この構図が成立しなければ、中国共産党は政権として、社会からの実効性と正統性を失うであろう。

葉剣英は、中華人民共和国建国直後、「黒社会」の解体、人民元の流通に努力した他、「地方主義」的であるとの批判が有りながらも、「土地改革の指導中、華僑と民族工商業者に対する政策、適用の区別を要求すること、適切に彼等の利益に配慮し、安全に扱うことに特に注意したのであり、これは広東の実情に符合したものであった」¹⁶⁾と評価される。

こうした建国当初の葉剣英は今日の中国の経済建設にも合致するものがあると思われ、葉剣英が客家出身ということのみならず、経済の実務においても当初、理念として否定されたものと現実の社会の要請を融合しうる点をも含めて有能であり、学ぶべきものがある人物として、梅州では評価されているのではないかと思われる。

故に、葉剣英は、市場経済の維持、安定等の意味でも、今日に通じる存在故に、強調されているのかもしれない。

先にも見た「建て増し」は、『『楼上寢室』の伝統特色』にも基づきつつ、市場経済の中、人口増によって、増築が為された、ということであろう（図29・30）。増加した人口を支えるためにも、



図29 いずれも、梅江から見た「凌風東、西路歴史文化街区」の写真。建増が思われる。

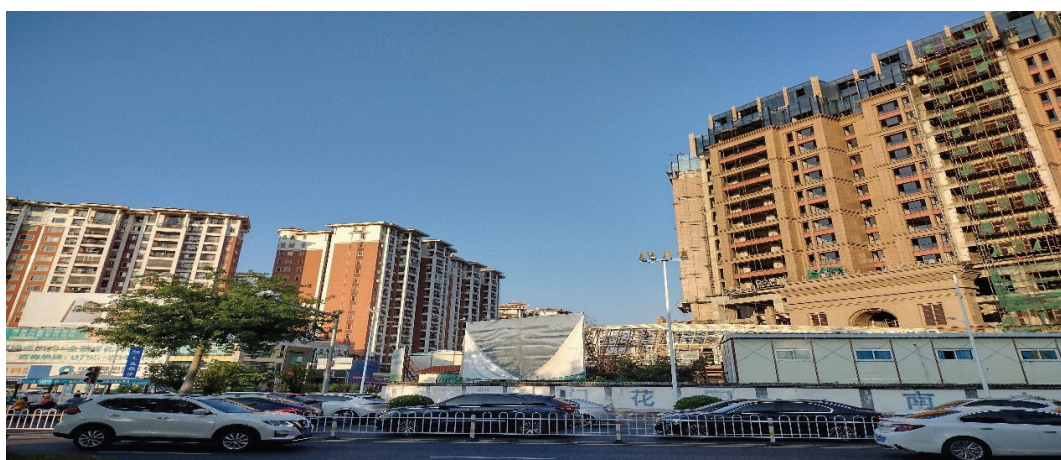


図30 高層マンション（左）と筆者が梅州市に転居してきて以来、建設が中断したままの高層建築（右）。右の建物が建設を中断したままなのは、（高額マンションとして）、新入居者の目処が立たないからだろうか。先の路地裏の住宅群と比較して、格差の象徴かもしれない。

一定の経済成長は不可欠である。故に、多角的な経済成長の活路を見出す努力も必要であろう。

経済成長の活路のためにも、人材が必要であり、故に、客家の教育熱心が肯定的に評価されている面もあるのではないか。

以上は、「伝統的正統性」(価値観)である。学宮内の孔子像もそうした事例の具体例である。

毛沢東時代のような確固たる方向性を有さず、市場経済に依拠して来た毛沢東後の各政権は、当然のごとく、実効性と正統性の根拠を経済成長に求めざるを得ず、その人材を大学入試、卒業等の教育を受けた人材に求めざるを得ない。又、社会の側もこれを支持している傾向が強い¹⁷⁾。

しかし、市場経済は貧富の格差が避けられない。貧富の格差が階級闘争等に発展すれば、経済成長等が鈍化、もしくは停滞し、反政権の動きが激化する等、実効性、正統性が崩壊する危険性もある。

階級闘争等を防ぐためにも、今日の中国共産党は、その創造時には否定したはずの「伝統的正統性」(価値観)を階級闘争を超越した社会統合のために援用することによって、一定の経済成長を維持し、階級闘争等に発展しないよう、ある種の多様性の制約(労働運動の抑制等)を行ない、さらなる経済成長の維持に努力するべく、正統性、実効性と融合させているのであろう¹⁸⁾。

孔子を祀る学宮内で、並行して中国共産党の歴史が功績として展示されているのは、その象徴的姿と言え、又、出発時に否定したものによって、自身の実効性と正統性を維持している皮肉な姿と言える。宗教と融合しているのもそれ故と言える(図31)¹⁹⁾。さらに、客家人が関羽を祀るのも、歴史上、幾度も国家破滅による亡命の苦難を経験していたことから、「国家に忠を尽くし、庶民を助ける人物」を大変に重要視していることも一因とされる。これも一種の「伝統的正当性」であり、同地の現在の政府はこれにも利用価値を見出しているのかもしれない。

他方、梅江区政府庁舎から伸びる車道の中央に、自動車の通行を妨げる形で、中国共産党の標語が置かれている(図32)。

中華民国時代、或いはそれ以前からの歴史と伝統を有する街とはいえ、本稿を執筆している2025年現在、今日の中国が皮肉な状況にありながらも、中国共産党政権によって統治されている社会であること、強調されているように思われる。



図31 孔子を祀っている「学宮」に掲げられた中国共産党の「教育基地」であることを示す各種の看板



図 32 車道の通行を妨げる形で置かれた標語（左）とそれを利用して為された駐車（右）



図 33 本稿での「路地裏」で見つけた毛沢東の肖像画（左）と嘉応学院近くの民家に残っていた「毛主席万岁」の標語（右）。いずれも剥げかかっており、ある種の「価値観」の移行を象徴しているかのように思われた。

終 梅州市域の散策から思ったこと

かつて、日本の社会での「一億総中流」意識が、労使（資）協調と相まって、経済成長を達成させ、「55年体制」、つまり、自由民主党による「一党優位支配体制」（自由選挙が為されているにもかかわらず、同一政党が政権を有し続ける政党制。一種の「事実上の一党制」であると言えよう）を支えたように、中国の社会においても、経済的利害の多様化によって、価値観の多様化が進んでいると思われるものの²⁰⁾、多数の「個人」が「中流意識」を有するようになれば、今日の中国共産党も、かつての自由民主党のように安定政権となるのかもしれない²¹⁾。その達成のために、中国共産党は手段として利用する形で、「伝統的価値観」に戻ろうとしているのであろう。カール＝マルクスはかつて、「歴史は繰り返す」

と言った。「生活」の維持はいつの時代も不可避であり、それ故の経済成長のため、マルクスの言葉が該当するのが、現在の中国の姿なのであろう。

梅州市内を散策しつつ、以上のように思った筆者であった（図 33）²²⁾。

注

- 1) 現在は江西省にて生活。
- 2) 拙稿「花萼楼訪問記 梅県の山奥から」『華南研究』第10号、83-93頁
- 3) 「騎楼とは、歩道にまたがる建物を意味し、覆われた歩道を示す。街路沿いの家の、道路に面した一階部分を柱楼として幅3～4mほど開放し、これが連続して出来た空間を騎楼と呼んでいる。騎楼は、夏季の強烈な日差しと連日のスコールという気候条件のなかで生み出された建築装置であり、遮陽避雨の役割を担っている」建築のことである。
当該地域の風土、生活に適合した建築的工夫であり、中国人（華僑）の手によるものであることが特徴である。「東南アジアのイギリスの植民地として発達した諸都市にも同様な形式が見られ」ることが指摘されている他、騎楼は「西欧の影響を受けやすい沿岸都市」のみならず、福建省の山深い地域にも存在するとされる（茂木計一郎「騎楼型民居の構成に関する研究（梗概）」『住宅総合研究財団研究年報』NO18、1991年、309頁）。
客家人も商売に長けた華僑である者も多かったであろうことから、地域の風土（実際、本稿を執筆している2025年6月現在、度々、スコールと思われる豪雨に見舞われた）と相まって、本文中で紹介した騎楼式建築が建てられたのであろう。
- 4) 「学宮」の「東廡」（「大成門」を右側に入った建物）での梅州史を解説したパネルによる。
- 5) 「宋、元以来、客家人は、疫病との長期の闘争を進行させ、豊富な抗疫経験を進行させ、我国の疫病防止に歴史的貢献を為して来た」（俞如先「歴史以来客家人对我国疫病防治贡献問題初探」『客家研究輯刊』2021年第1期、124頁）のであった。
「客家人はさらに、全体経験、自然認識、現地取材を通して、多くの積極的な防治の有効な経験と方法を積んで来た。全体経験方面では、飲用清潔水が伝染病の発生を減少させ得ると認識していた」（同上、125頁）。
トイレの水は飲用水ではないものの、客家人が生活用水を清潔に保つ必要があることを認識していたことが伺える。
さらに、清末から新中国成立まで、様々な疫病が流行っていた（同上、127頁）。
1920年代から30年代、客家人は、中国共産党や紅軍を助け、防疫に貢献したのであった（同上、128-129頁）。客家人が中国共産党を支持したのは、ある種の被差別者として（彭湃著、山本秀夫訳『近代中国農民革命の源流』アジア経済研究所、1969年、103-105頁）、現状の打破を求めているからかもしれない。
- 6) 図34 梅州市内でのキリスト教会の看板。キリスト教会は汕尾市等、他の地域にも見られ、経済格差等の社会矛盾の緩和の役割をなしていると思われる（拙稿「百年後の『近代中国農民革命の源流』一汕尾、広州訪問記一」『立命館文学』694号掲載）。梅州市のキリスト教も又、現実の社会矛盾を緩和するため、体制と融合しつつ、存在しているのかもしれない。
- 7) 楊鶴書「粵東香族と漢族客家宗教祭典の比較研究」『比較民俗研究』13、1996年、4頁
- 8) 嘉応学院での客家人女性教師からの助言
- 9) 周珏他「望子成龍：客家崇文重教的文化機制探析」『客家文化研究』2023年第2期、35頁 楊鶴書「粵東香族と漢族客家宗教祭典の比較研究」全経済雑誌、4頁
- 10) 「望子成龍：客家崇文重教的文化機制探析」前掲雑誌、35頁
- 11) 嘉応学院での客家人女性教師からの助言
- 12) 「望子成龍：客家崇文重教的文化機制探析」前掲雑誌、34-35頁
この他にも、女子教育、武術教育をも行っていた（同上、35頁）。
械闘が盛んに為されていたことから、宗族を単位に自衛のためにも子弟を教育していたのであろう（拙稿「花萼楼訪問記 梅県の山奥から」前掲雑誌、85頁、鈴木智夫『洋務運動の研究』汲古書店、1992年、481頁。譚隸華「略論清代広東宗族械闘」『広東歴史問題論文集』稻禾出版社、1992年、269-271頁。中村治兵衛「民国初年広東省の村落の械闘について」『近代中国研究』山川出版社、247-248頁）。
- 13) 三石善吉「ソ連軍事顧問団と黄埔軍校」『筑波法政』第9号、73-83頁
段雲章他『陳炯明的一生』河南人民出版社、1987年、269-271頁
- 14) 当時、陳炯明は既に農民の支持を失いつつあったこと（拙稿「彭湃に関する一考察」『立命館文学』627号43-44頁）も、葉剣英の軍が歓迎された一因かもしれない。
- 15) 創設以来、今日まで地方政府の支持を受けているとされる嘉応学院は、「嘉応の特色ある客商（客家商業人材）を培養、探索」すべく「先進的理念や豊富な経験を有する“学者型企業家”や“勵志型企業家”を招いている」



図34 梅州市内でのキリスト教会の看板

（「嘉応特色的客商人材培養探索」『客家研究輯刊』2021年第1期、159、160頁）

16) 葉劍英伝編写組『葉劍英伝』当代中国出版社、2015年、301頁

17) 中国の大学入試制度（高考）は、

「政府にとっては、経済発展に資する人材を大量に育成するという点で、入試制度がプラスに作用した。1980年代以降、受験生を選抜し、一流大学に進学させることで優秀な官僚、経営者、科学者が社会に供給された。

その一方、国民にとって入試制度は、階層の上方移動を実現する機会となった。中国は学歴や学校のブランドによる賃金格差が大きく、多くの人が少しでも上の教育課程に進むこと、そして、有名校に進学することを目指した。有名校への進学が就職に有利で、高給も期待出来るという認識が社会に浸透した結果、受験競争に勝ち抜くことが上の所得階層に移動する最も確実なルートと認識されるようになった」

と指摘されている（佐野淳也「中国の教育政策の方向性と課題」『環太平洋ビジネス情報 RIM』Vol.22 No.85、2022年、39-40頁）。

客家人は伝統的に、伝統的に、「受験競争に勝ち抜くことが上の所得階層に移動する最も確実なルートと認識」している人々と言えよう。



図 35 「高考」期間中、受験生に無料で朝食を提供することを宣伝する横断幕（左）と「煙草の誘惑を拒絶せよ」と呼びかける小学校の標語（右）。左は客家の伝統文化の影響かもしれない。他方、右のような警鐘が鳴らされるのは、受験勉強の重圧、脱落等が非行を引き起こしているのかもしれない。

18) 「専東香族と漢族客家宗教祭典の比較研究」前掲雑誌、5頁

19) 又、客家人の伝統文化が、今日、中国共産党政権下で強調されているのは、客家人の「共同体」的特徴もあるのではない。

周囲を山に囲まれた福建、広東、江西各省の地域では、客家人は経済的に相互依存をなし、「共同の同胞意識」を為して来たと言われ、

「客家人達の共同体と中華民族の共同体は密接に相通じている。客家人共同体の主体部分を形成する漢族と香族等はいずれも中華民族大家庭の有機的組成部分である」

とされる（俞如先「客家民系人共同体命題与現實意義初探」『客家研究輯刊』2021年第2期、20頁）。

「諸侯経済」による各地域の半独立的とも言える現状が言われる中（「現代中国における中央と地方－諸侯経済下の中国に関する考察－長江流域を中心に」『立命館文学』663号、215-174頁）、「貿易を中心として経済交流を深め、通信や情報、人的交流を増大せしめることによって、政府主体や市民どうしの間に、心情レベルにおいて 質的な変化（敵対意識から仲間意識へと）に発生し、そのことによって、統合の十分条件としての『安全保障共同体』が達成されていく」概念としての「交流主義」（鴨武彦「国際統合の理論」『講座国際政治③』東京大学出版会、1994年、26頁）による各地域の統一を企図し、そのモデルとして、客家の伝統的価値観を利用していると思われる。

本文中でも紹介した客家人・葉劍英の実家一帯は、現在は紀念園となり、学宮と同じく、「教育基地」となっている。葉劍英の実家には魚塘があり、中国共産党による革命の継続を主張する標語が掲げられている。



図 36 葉劍英紀念園の全景



図37 葉剣英紀念園の葉剣英の実家（左）とその「赤い故事をよく語り、赤い血脈を継続せよ」という標語を掲げた正面の魚塘（中）、儒教の語句である「論語」が刻印された土産物の定規。「赤い」は中国共産党の革命当初からの思想についてであろう。



図38 「教育基地」であることを示す紀念園内の看板。しかし、紀念園内の土産物屋では革命によって否定されたはずの儒教の伝統を刻印した定規が土産物として売られていた姿も、学宮内で祀られた孔子と同じく、出発時に否定したものによって、自身の実効性と正統性を維持している姿と言える。

- 20) 拙稿「綿陽体験記 四川の一週にて思ったこと一新旧の混在する街にて」『華南研究』第9号、2023年、58頁
 21) 「現代中国における中央と地方－諸侯経済下の中国に関する考察－長江流域を中心に」前掲雑誌、参照。
 22)

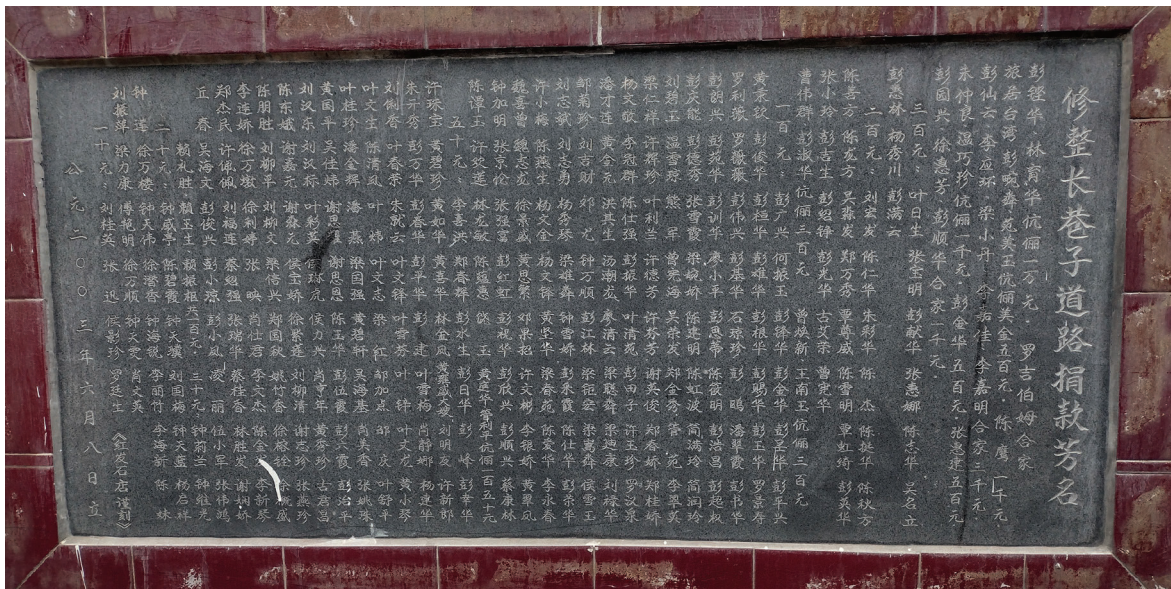


図39 ある「路地裏」で見つけた道路修理に関する寄付金の芳名録

「旅拠台湾」（台湾にて暮らす）の語句に見られるように、伝統的に台湾との関係があったとも思われる。こうした点からも、今日の中国共産党は、経済的に、社会の側からの伝統的価値観に支えられているというのが、現実なのであろう。こうした点からすれば、台湾の現状維持は、中国共産党にとって、必要であり、武力による台湾侵攻は愚策ではないか。台湾側としても、それを見越した上で、今日、既に実現した複数政党制等の所謂「政治的民主化」を維持するためにも、「台湾独立」等、中国共産党を刺激しかねない主張を如何に考えるか、が重要であろう。

（本学大学院博士後期課程修了）